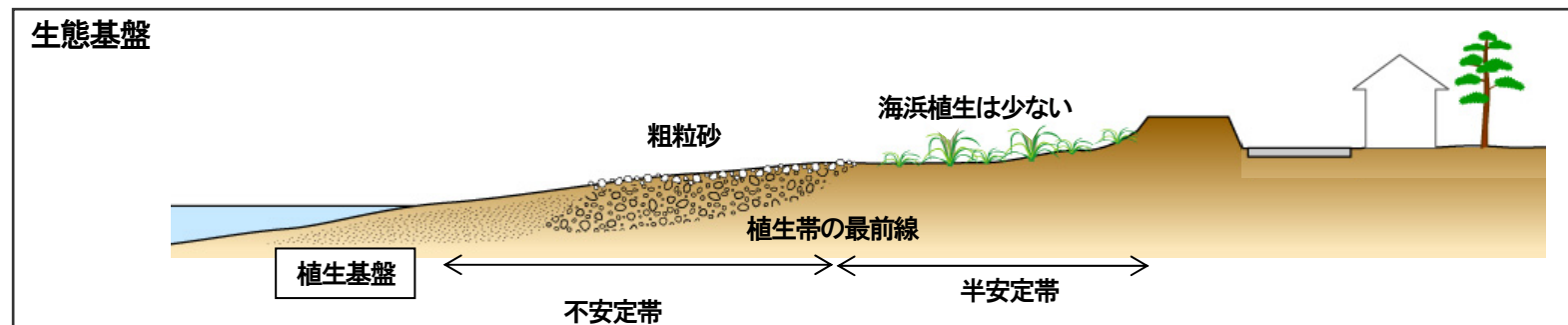
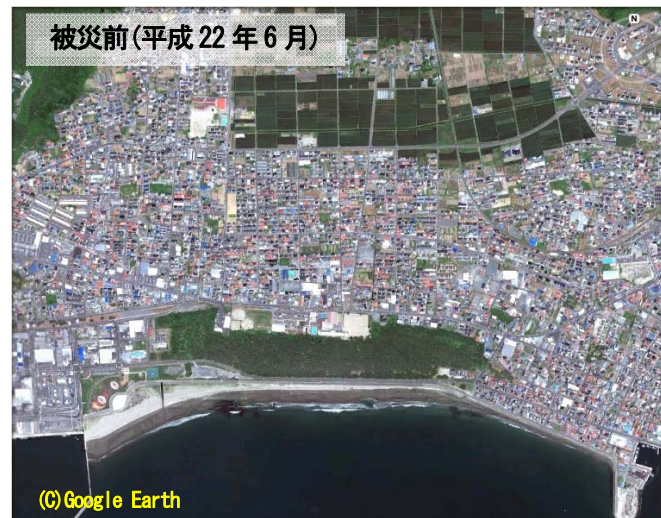
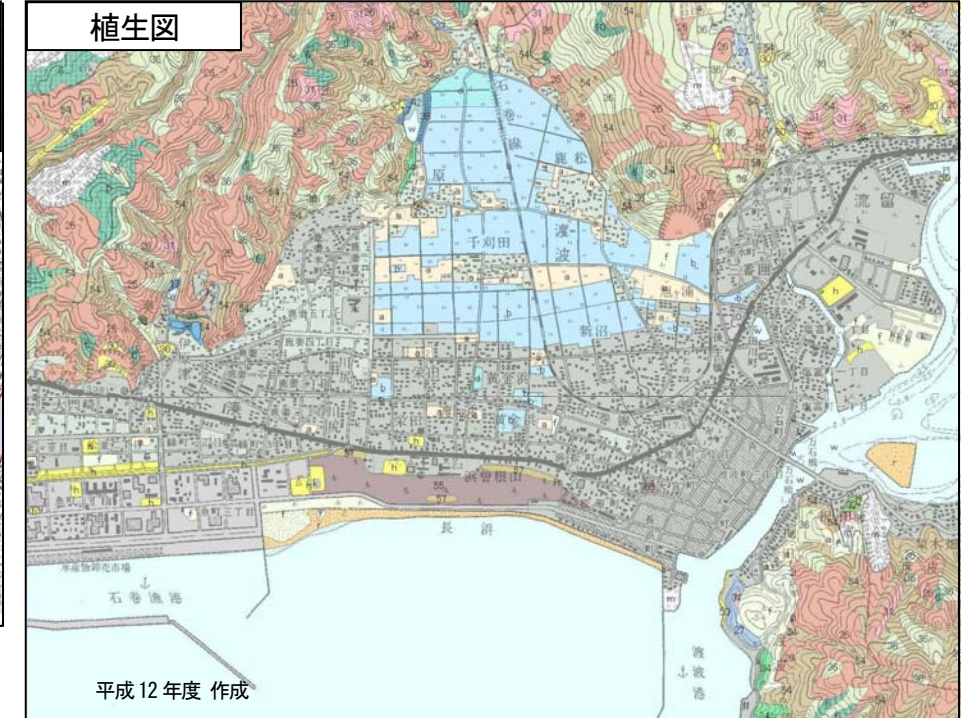
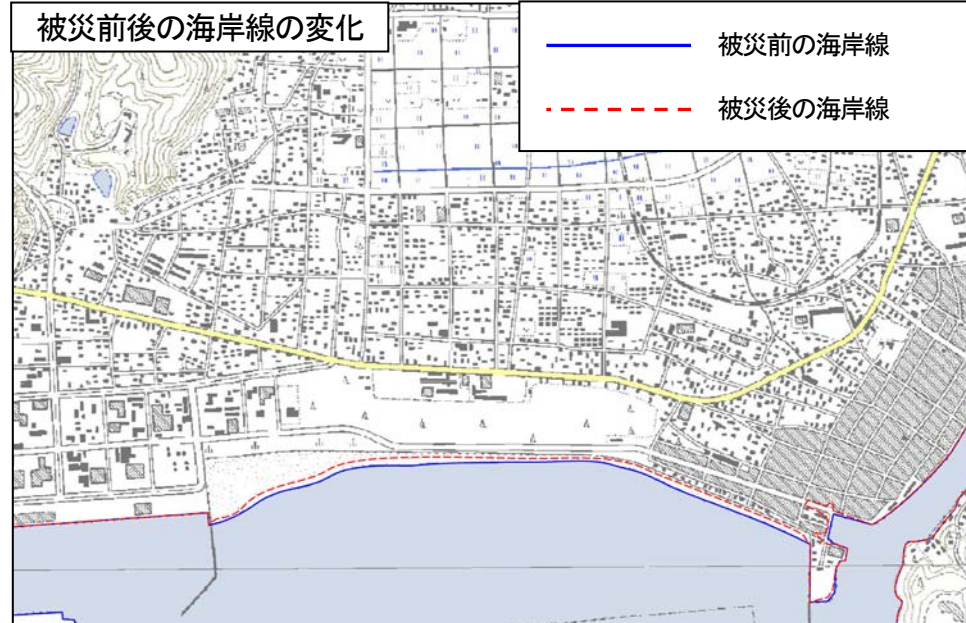
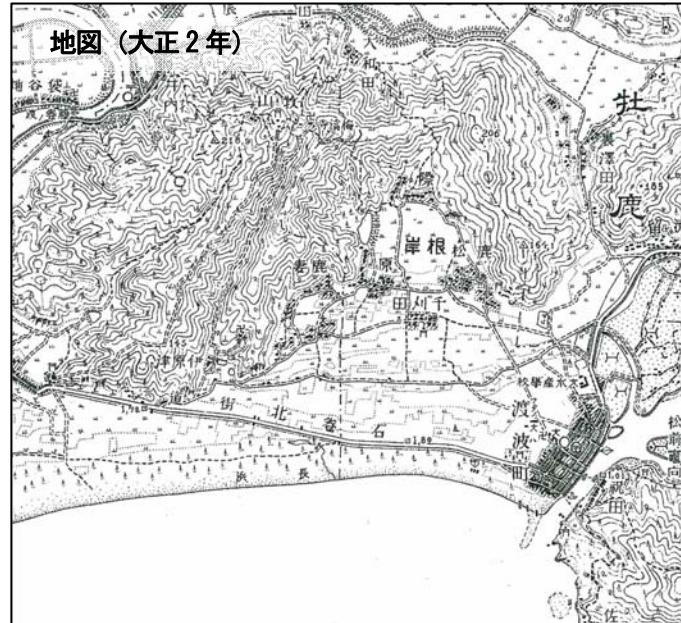


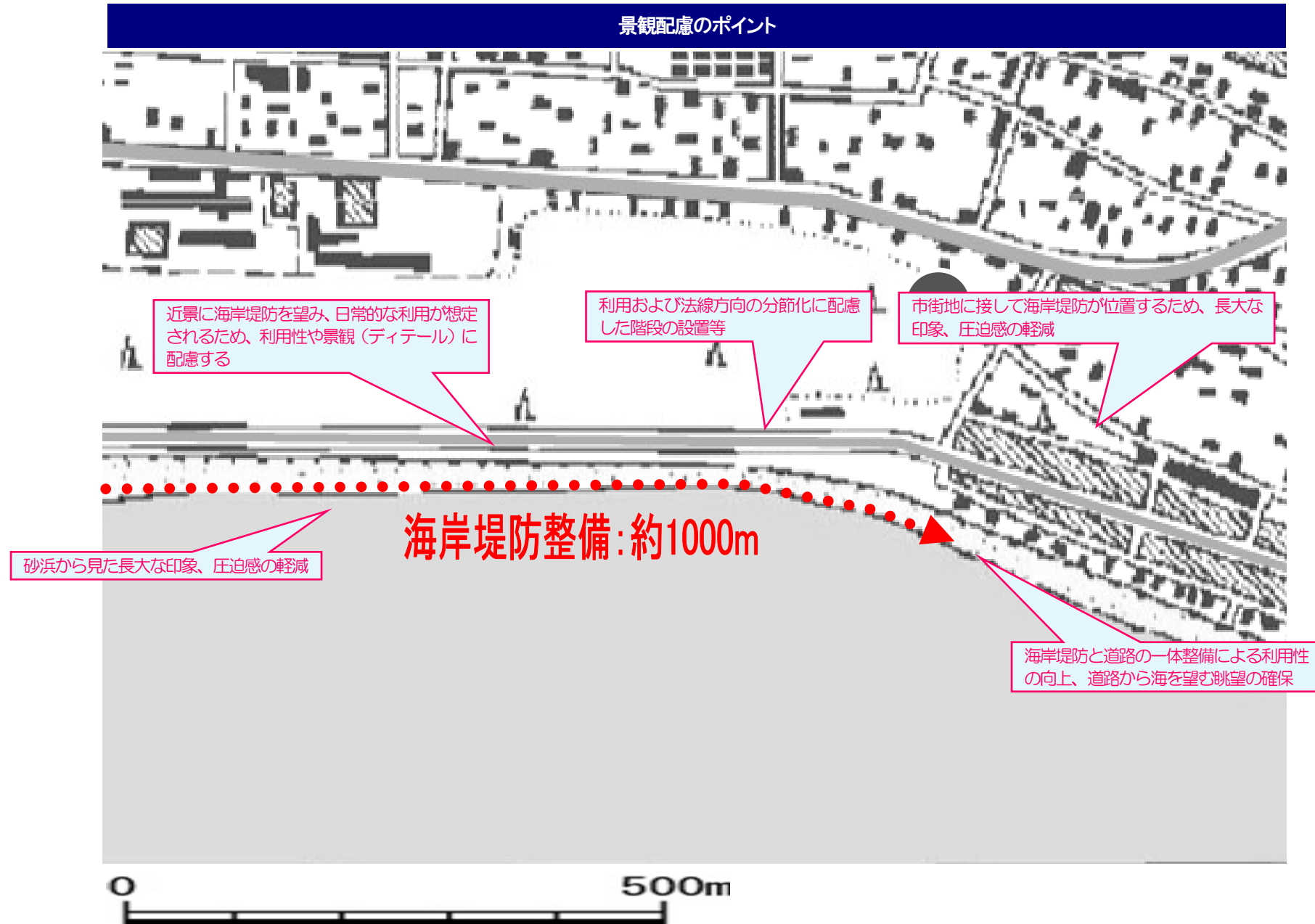
《地区の概要》

地形・生態系特性

- ・現在の市街地は、かつては海岸林（松林）であり、背後地の街道の周囲は農地が分布していた。
- ・かつての海岸林（松林）は土地開発により消失した。



《景観配慮のポイント》

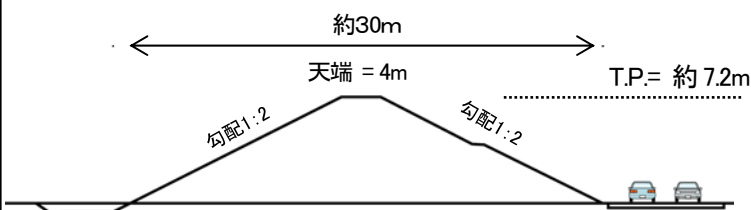


《検討条件と検討対象パターン》

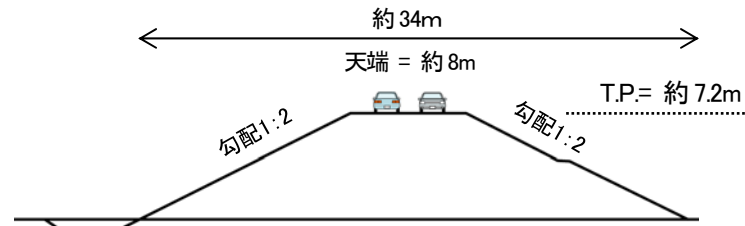
検討条件（施設構造）

海岸堤防【想定される標準断面】

◆A パターン：原位置復旧



◆B パターン：堤防と道路の一体整備



※道路高については、堤防法尻で整備した場合を想定して検討している

- ・海岸堤防は対象地区の前後区間で残存
- ・高さ T.P.=約 7.2m、堤防敷 W=約 30m、延長約 1000m の大規模な構造体を想定
- ・天端は 4m を想定。B パターンは 8m を想定。
- ・法面勾配は表裏ともに 1:2 を想定。表裏法面はコンクリート構造。

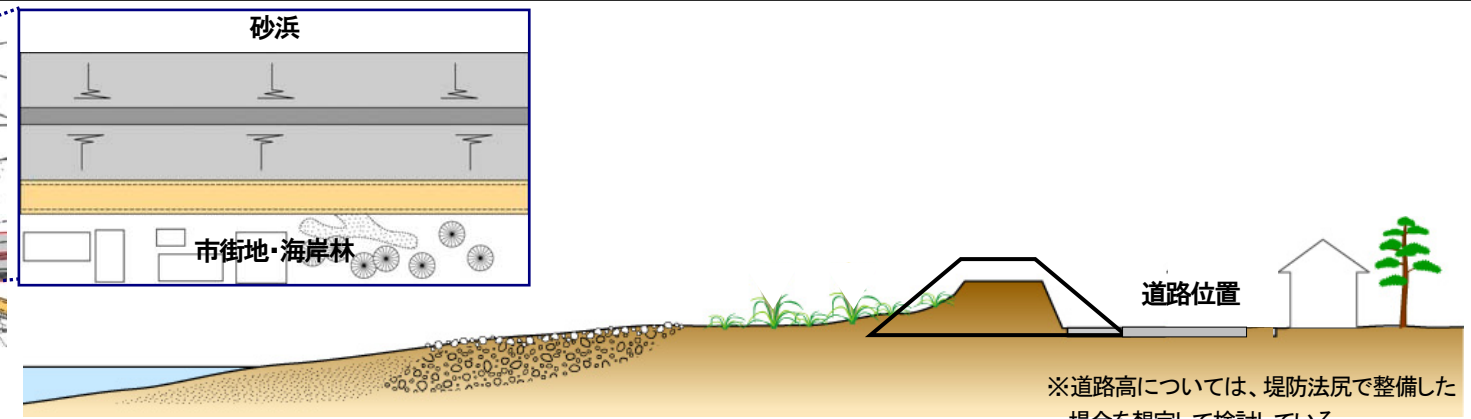
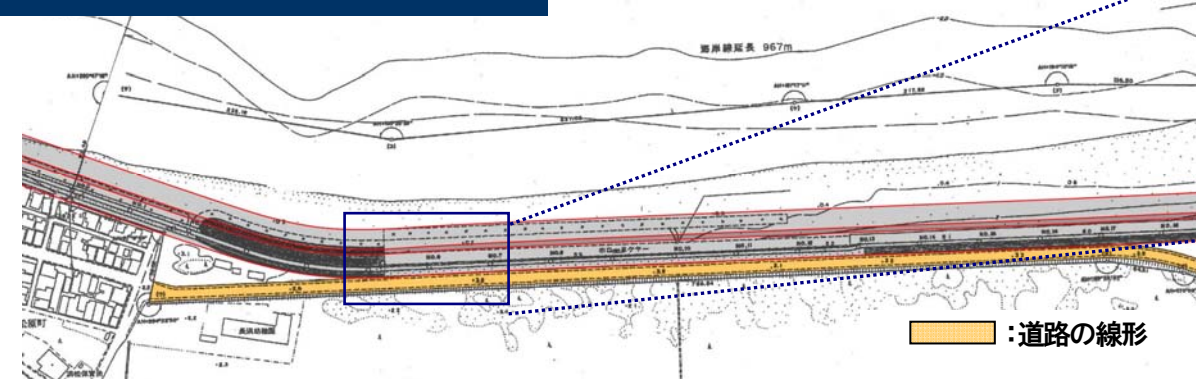
まちづくり計画



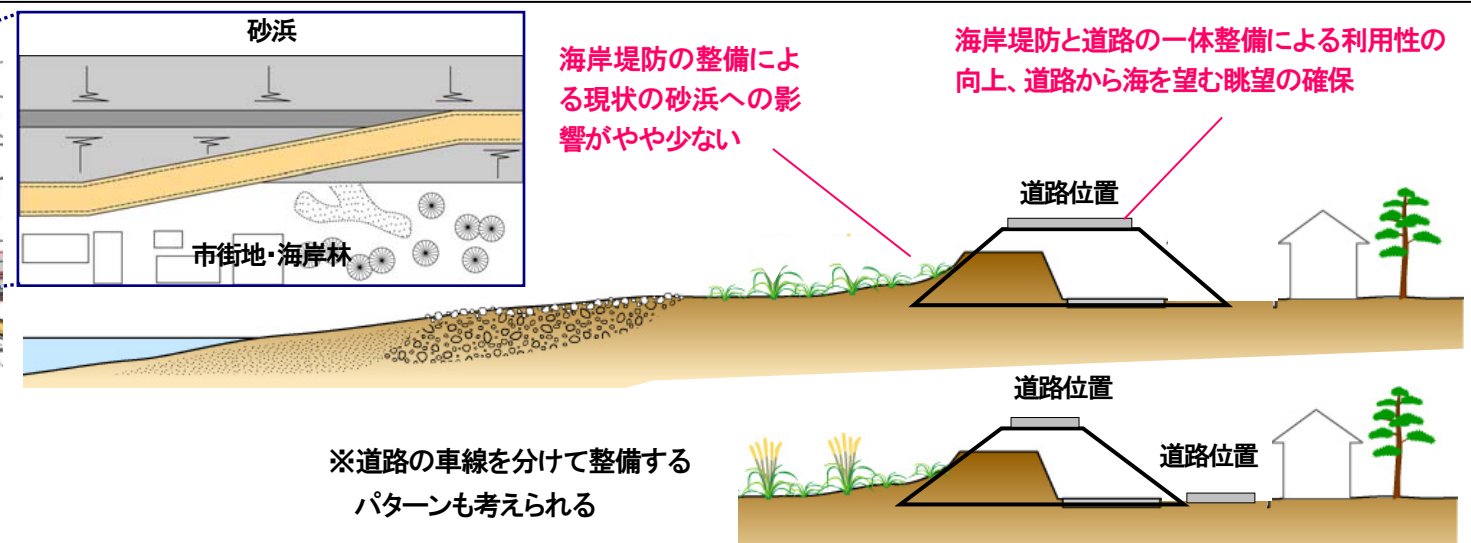
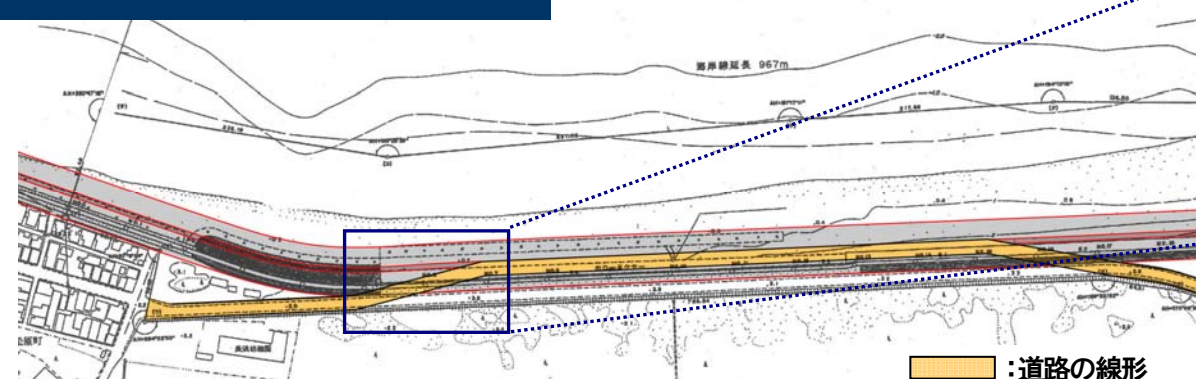
出典：都市基盤復興基本計画図（案）

検討対象パターン

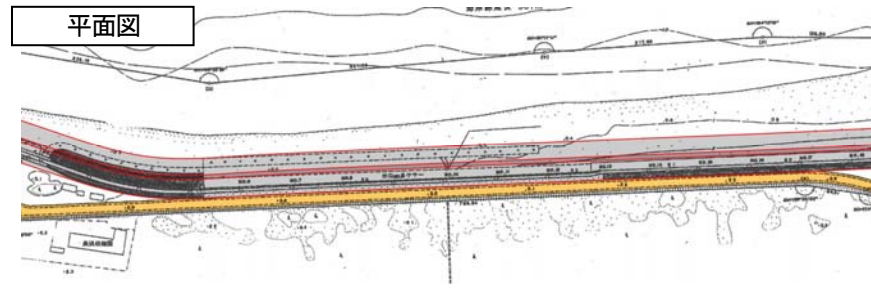
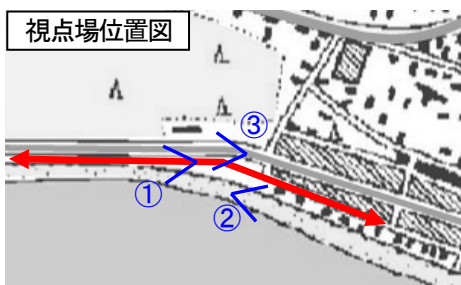
◆A パターン：原位置復旧



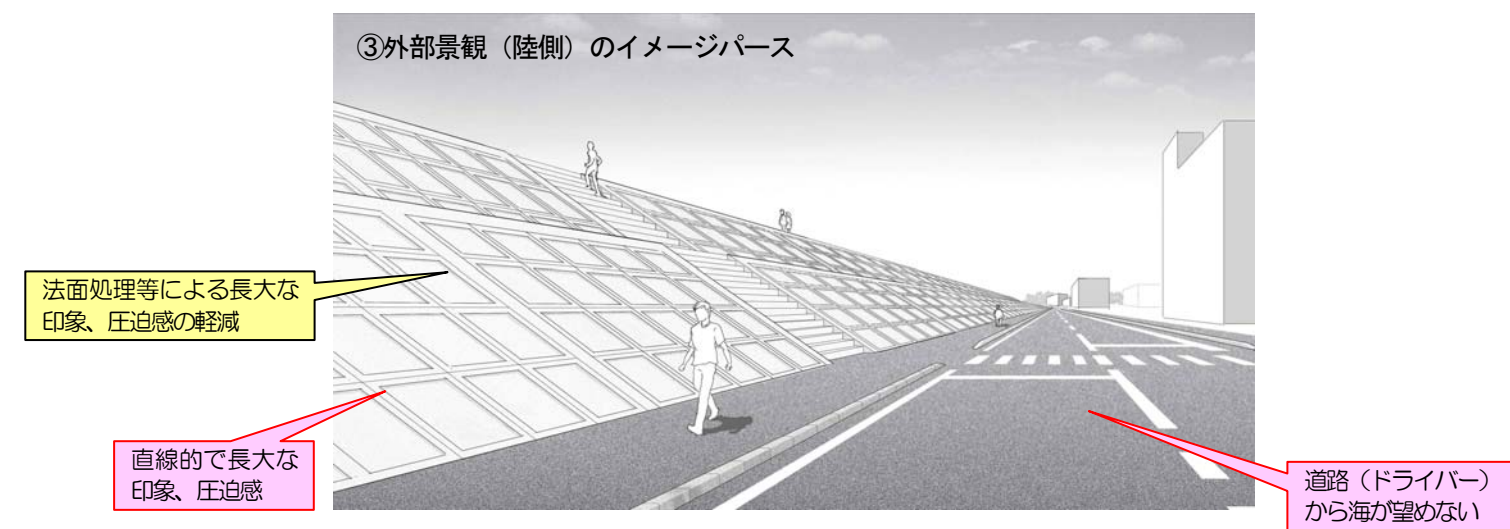
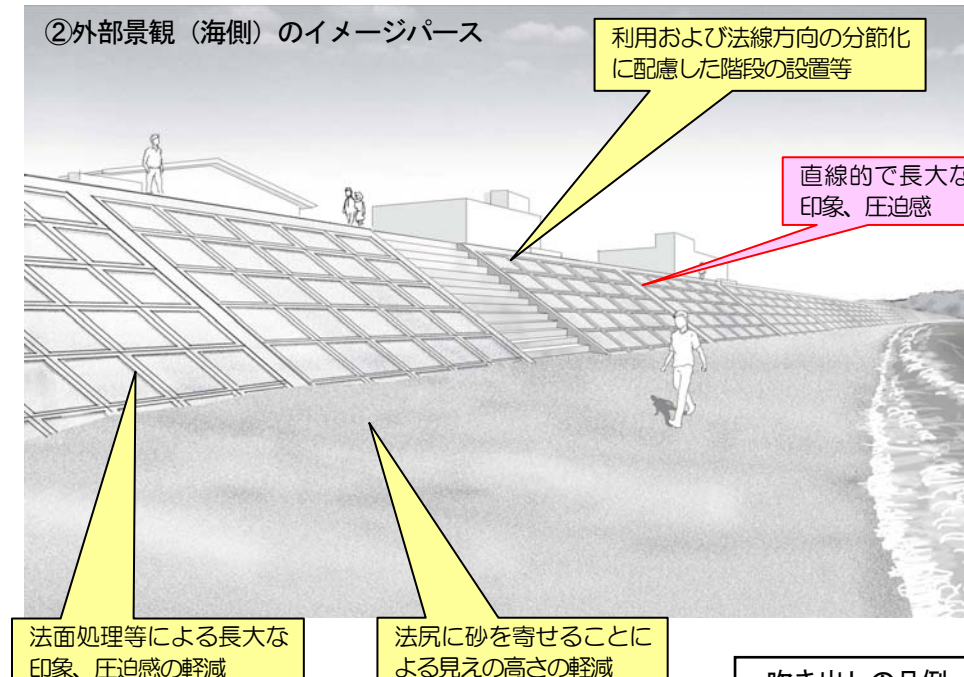
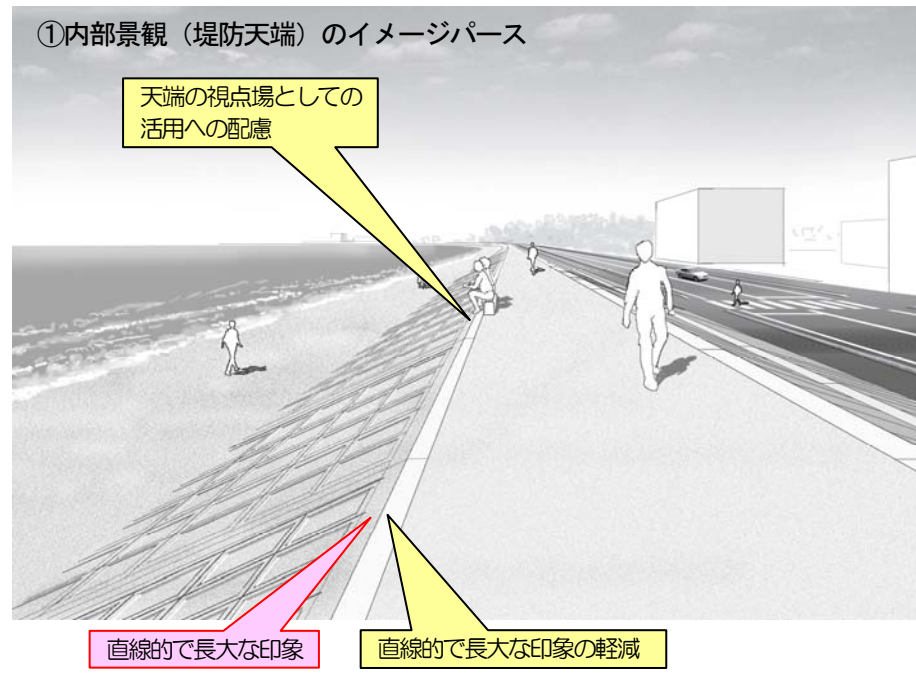
◆B パターン：堤防と道路の一体整備



《具体的な景観配慮例》 Aパターン：原位置復旧



※道路高については、堤防法尻で整備した場合を想定して検討している

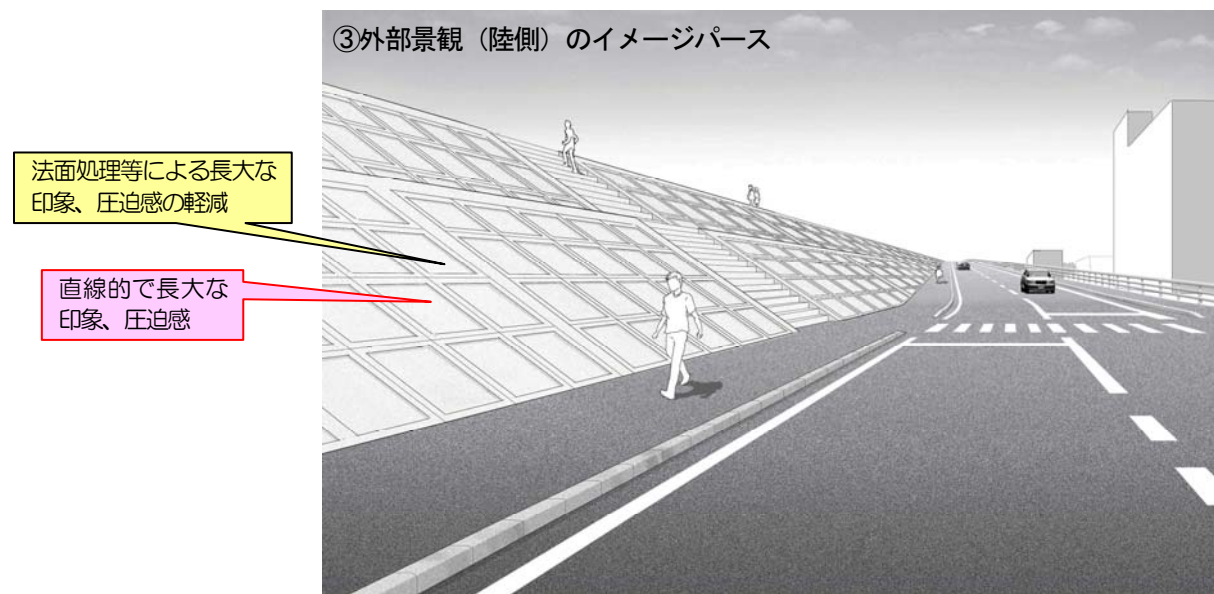
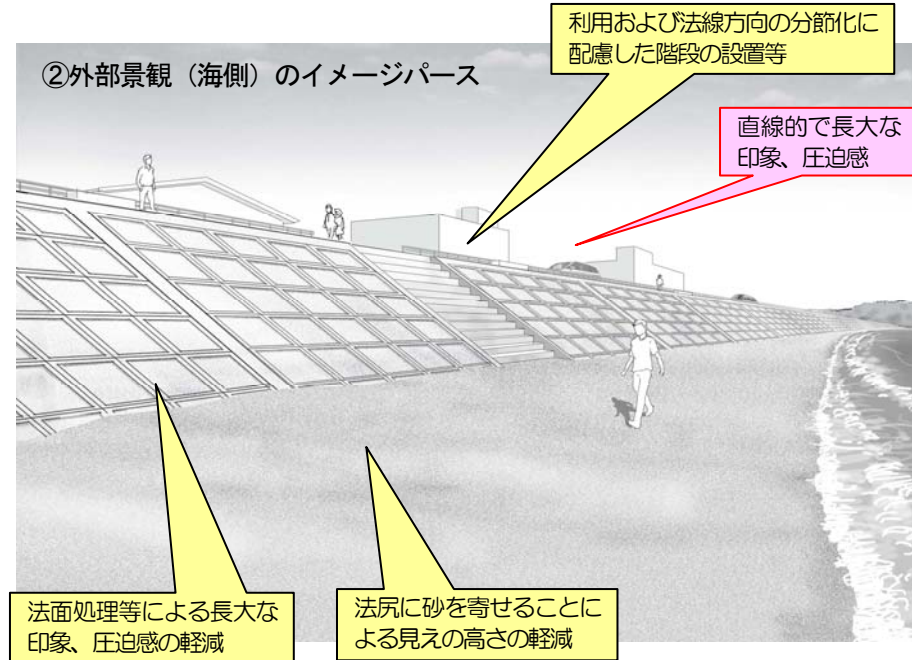
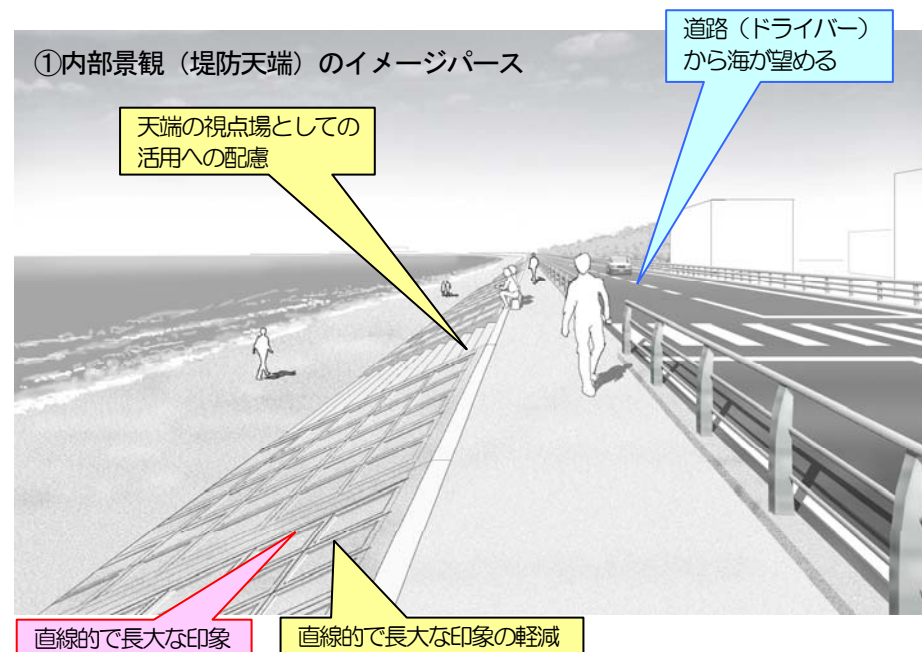
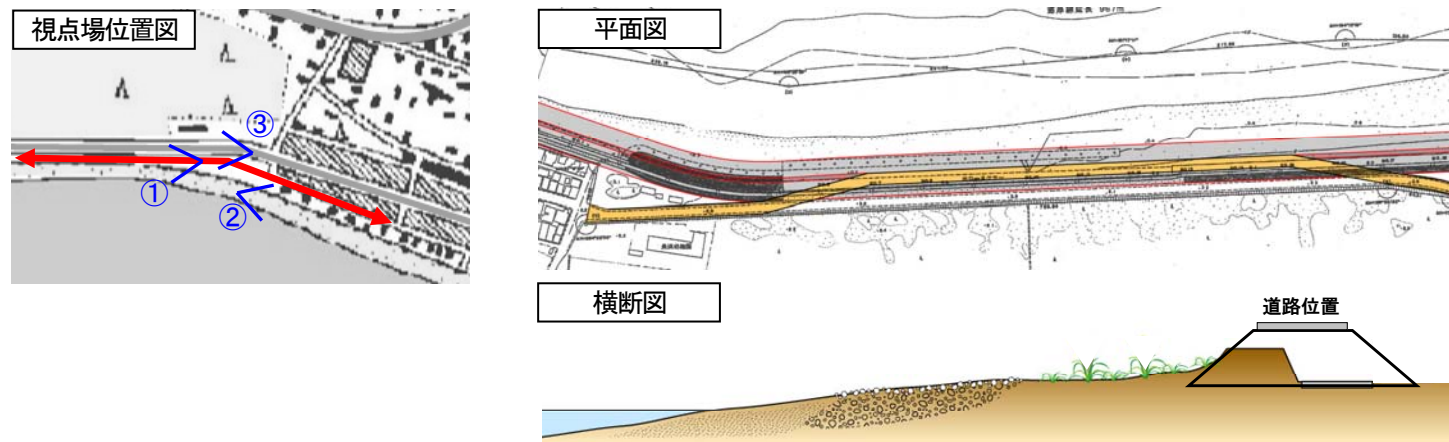


吹き出しの凡例

- 長所
- 短所
- 配慮事項

| | 特徴・評価 |
|----------|--|
| 視覚的景観 | <ul style="list-style-type: none"> 道路（ドライバー）から海が望めない。 水平方向に長い直線形状により構造体の存在感が強調され、直線の長大な印象を与える。 法面処理の工夫等により長大な印象、圧迫感の軽減が不可欠となる。 特に市街地に接して海岸堤防が位置するため圧迫感の軽減に配慮する必要がある。 階段などを活用した分節化による景観への配慮が必要となる。 |
| 地域性 | <ul style="list-style-type: none"> 市街地に隣接し、利用者が多いため、利便性や地域になじんだ景観形成に配慮する必要がある。 新たな眺望視点として天端の利活用が期待できるが、十分な砂浜の確保が困難な部分があり、利用への課題が残る。 原位置復旧のため、陸側の土地が最大限活用可能である。 |
| 生態系 | <ul style="list-style-type: none"> 堤防表法尻に砂を寄せること等により、植生等の生育空間の拡大が期待できる。 |
| サステナビリティ | <ul style="list-style-type: none"> 汀線から堤防までの空間、背後地空間が少なく、気候変動による海面上昇等への対応の余地が少ない。 汀線から堤防までの空間が少なく、波浪等による施設への外力が大きいため、施設の維持に労力を要する可能性がある。 堤防裏法尻の背後に道路があることで、越流した津波による洗掘防止対策としての効果が期待できる。 |
| コスト | <ul style="list-style-type: none"> 原位置復旧のため、新たな用地費等は発生せず、用地取得に係る調整が不要である。 |

《具体的な景観配慮例》 Bパターン：堤防と道路の一体整備

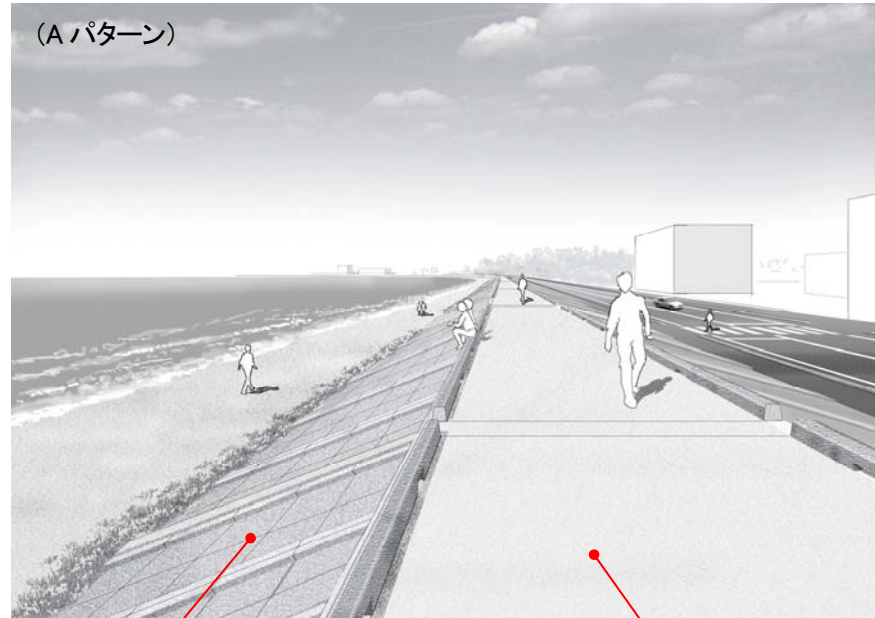


吹き出しの凡例
 長所 (Blue box)
 短所 (Red box)
 配慮事項 (Yellow box)

| 特徴・評価 | |
|-----------|---|
| 視覚的景観 | <ul style="list-style-type: none"> 道路（ドライバー）から海が望める。 水平方向に長い直線形状により構造体の存在感が強調され、直線的に長大な印象を与える。 法面処理の工夫等により長大な印象、圧迫感の軽減が不可欠となる。 特に市街地に接して海岸堤防が位置するため圧迫感の軽減に配慮する必要がある。 長く直線的な構造物となるため、分節化等の配慮が必要となる。 |
| 地域性 | <ul style="list-style-type: none"> 市街地に隣接し、利用者が多いため、利便性や地域になじんだ景観形成に配慮する必要がある。 |
| 生態系 | <ul style="list-style-type: none"> 海岸堤防と道路の一体的な整備により、現状の砂浜への影響がやや少なくなり、自然地形に応じた本来の生態系の保全・復元の可能性が向上する。 |
| サステイナビリティ | <ul style="list-style-type: none"> 汀線から堤防までの空間がやや広がり、気候変動による海面上昇等への対応の余地がやや増える。 汀線から堤防までの空間がやや広がり、波浪等による施設への外力の軽減が図られ、施設の維持管理への労力がやや軽減される。 海岸堤防の拡幅により、越波等への強度が増すことが期待できる。 |
| コスト | <ul style="list-style-type: none"> 海岸堤防の拡幅により、コストが増加するとともに、道路管理者との調整が必要となる。 |

《具体的な景観配慮例（細部デザインへの配慮）》 景観配慮後のイメージ

①内部景観（堤防天端）のイメージパース



自然風に見せるための石垣風の表面処理やペインティング等の装飾を行ったりせず、縦のリップ模様によりシンプルに見せる

天端舗装は、石張り等で自然風に見せたり、ペインティングやカラー舗装等の装飾を行ったりせず、維持管理や利用性に配慮してシンプルなコンクリート被覆またはアスファルト舗装とする

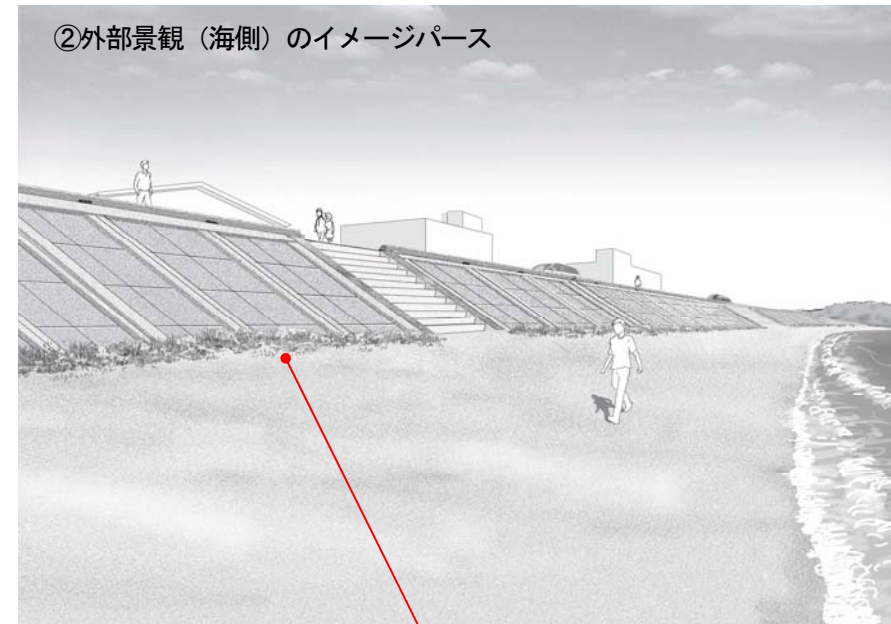
縁石や天端コンクリート(法肩部)は、目立つため、洗い出し加工された製品や洗い出し処理を行い、明るさを落とし、柔らかい印象を与える



法面のリップや階段位置に合わせてテクスチャに変化を入れることで、天端の面にも表情を与える

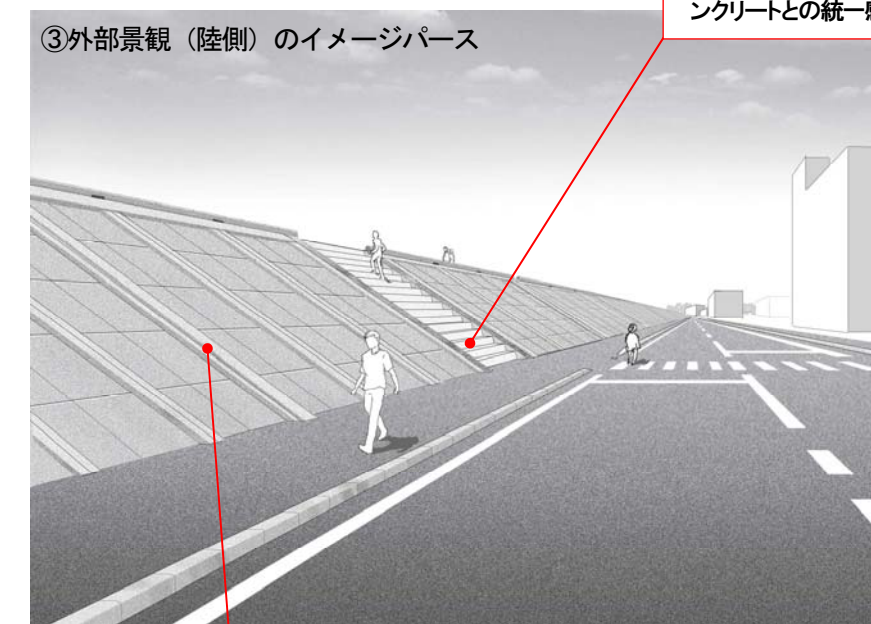
防護柵は必要性に応じて設置するが、設置する場合は、シンプルで透過性のある形状を採用(色は、「景観に配慮した防護柵の整備ガイドライン(国土交通省)」から選定)

②外部景観（海側）のイメージパース



法尻に砂を寄せることで、見えの高さや直線的な印象を軽減できる(ぼかし効果)

③外部景観（陸側）のイメージパース



・縦のリップ模様^{※1}が強調されることにより、“安定感、支える感覚”を表現できる^{※2}とともに、法面に陰影が生まれ明度を抑える
・均等な間隔での分節化が視覚的なリズム感を生み、長大な印象を軽減する

・階段等、付帯施設は装飾を行わず、シンプルな形状とする
・手摺りを設ける場合は中央に設置し、収まりに配慮する
・階段帯工の表面は洗い出し加工を基本とする(色味は、コンクリートとの統一感に配慮し、グレー系を採用)

※1 パースは縦のリップ模様を凸にした場合
※2 “構造物が背後地を防御し、支えている”という本来の機能を伝えることを念頭としたシンプルなデザインの考え方